

フランソワ先生とユージ先生

フランソワの講習を見て感じたこと

クライミングジム・セブンエー 小日向徹

前評判

フランソワ・ルグランが先生？世界のトップクライマーが講師をつとめる、上級者向けの講習の話をユージから聞いたときに、どうも実感がわかなかった。トップクライマー即良いコーチとは思えなかったし、彼が世界トップレベルの秘密を本当に教えてくれるのか大変不安だった。なによりもあのフランソワが？(あまり良い評判を聞いたことがなかったので、)という思いが頭から消えなかった。実際数少ない問い合わせに対しても、「詳しいことは、当日にならないと、、、ただフランスに行って、フランソワに会って、さらに教えてもらうなんて(現実性は?)ことに比べると、今回はすごいチャンスだと思います。とりあえず、通訳とアシスタントとして、ユージも来ますので。」と言うのが精一杯であった。が何とか 12 名の参加者を確保することができた。遠くは大阪・名古屋からの参加者もいる。

前日 準備

前日の 13 日の金曜日、朝 10 時ちょうどに、フランソワ・ルグランは平山ユージとともに現れた。ジムはまだ営業時間ではなく、ユージとあわせて数人しかジムにはいない。この時から、翌 14 日の夜 8 時過ぎまでの時間は驚きの連続であった。

前日は、講習用のオンサイト課題のセットのために 2 人はジムに来ている。驚いたのは、その集中力と、こだわりであった。一応、現在についているホールドの付け替えや、向きの変更は、お好きにどうぞと書いておいたが、自分の造る課題に関して使うホールドに関してのこだわりは半端なものではなかった。延々とムーブを確認しながら微妙な向きのチェックを繰り返し行っているのである。しかも飽きることは、全くない様子である。楽しくて楽しくてしょうがないという顔をしている。朝 10 時から始めて夜の 7 時過ぎまで、途中ヤマケイの取材以外は、ほとんど休みもとらず、ホールドをいじくり回していた。また翌日の講習中も昼食を忘れるほどの熱中ぶりで、参加者の方が先に、「先生腹へったー！」と申し出る始末であった。

さて、この日に作ったのは、フランソワがコンペを意識した約 70-80 手の 7C/8A を 1 本と、2 人の合作である、たぶん 7B 程度の 30-40 手の課題が 1 つ。そしてユージが 30 手の 5.12 程度の課題 1 本であった。

彼については、取材もいくつかの雑誌から行われたことなので、一般

的なことは省き、個人的に目が点になってしまったことを書かせていただく。

その 1 記憶力

前日、課題セットの日、ユージはどうしても用の事があり、4 時過ぎに帰ってしまった。残りの時間はフランソワが 1 人でセットを行っていたのだが、すべての課題設定が終わり、これからシールを貼ろうと言うことになったとき、ユージの課題のホールドとスタンスが良く分からない。(約 30 手)ちなみにすべての課題は、スタンスも限定されている。「コビ、覚えてるか？」と聴かれたもののぼんやりと見てただけなので多分このあたりかな？と答えるのが、精一杯であった。

ところが、フランソワはエーとエーとと何かつぶやきながら次々とシールを貼っていくのだ。彼も自分の課題の設定に夢中で、ユージの課題を覚えようとはしていなかったのにである。それなのに、使われた約 40 個のホールドとスタンスをほぼ覚えているのだ。翌朝ユージが付け足したシールはスタンスの確か 1 個だけだった。

昔ユージが「自分がどうしてもフランソワに勝てないのは、(オブザベーションで)おれはホールドまでなら覚えられるけれど、あいつは、スタンスまで、ほぼ完璧に覚えてしまうからなんだよね。普段一緒に登っていると、そんなに差を感じないんだけど、コンペでのその差は結構大きいんだよね。」と語っていたのを思い出した。

フランソワの帰国後、この一件をユージに話すと、「フランソワはなにかこう不思議な能力を持っているみたいなんだよね。ホールドとスタンスを追っているだけでムーブもグレードも間違いなく分かっているみたいだし。彼をただ見るだけだと、だれも気がつかないみたいだけど、これが(非力な)彼の強さの秘密の 1 つなんだよね。自分もフランソワのそういった能力がすごいということになかなか気がつかなかったんだけど。最初は何でフランソワが勝つのか良くわからなかったんだ。」

その 2 登り

フランソワのクライミングの特徴は、壁に登っているというよりも、なにか空間に登っているような感じがすることだ。彼の課題は、使われているホールドのかかりは比較的良いのだが、ムーブが非常に立体的なのだ。ひさしぶりに目が点になった。たびたび足が先送りされながら、特に傾斜がきつくなるほど、身体の向きが頻繁に入れ替わる。地面に対してからだは常に斜めから横向きになっていて、めったに身体が真っ直ぐにならない。しかも足に吸盤でもついているのでは、と思えるほどスタンスへの足の置き方や、様々なフックが柔らかくかつ正確に決められている。また傾斜がきつくなるほど、今までの日本では馬鹿にされるであろう各種の小技が繰り出されてくるのだ。ちなみに今回の講習会用の課題は、すべてスタンスも指定されたものか、ホールドとして使ったもの以外は使

えなくなっている。

7a では、空間的なつながりのあるボルダーをいくつか用意してあるのだが、そこで彼はまるで水を得た魚のようにいきいきと動くのだ。その動きのいくつかは今まで見たこともない動きだったので、驚いていると彼が説明してくれた。

これが非力な自分がコンペで勝てる要因の 1 つだという。ルーフなどの超強傾斜壁(特に複雑なつくりの壁)での立体的なムーブの読みと組立の早さと、さらに力をセーブするための様々なフックをはじめとしたテクニックの正確さで、自分より力のあるクライマーに勝つのだという。

ワールドカップの覇者が自ら自分は非力であると言うのには、意外な感じがしたが、ユージに聴いたところ、本当だという。しかも悪いホールドに強いかというところでもないようだった。フランソワによると、コンペでは自分の限りある力をいかに無駄使いたくないで、登るかが最大のポイントなのだと言う。力のない自分が勝つことはとてもうれしいことなんだと、フランソワは本当にうれしそうに語った。

その3 教えたこと

実際に講習を受けている人の印象とは異なるかもしれないが、フランソワが教えていたことで、とても驚かされたのは、「みんな上半身だけで登っている、もっと足(下半身)を使って、だからしっかりと足を決めて。スタンスに集中して！」とまるで、初心者講習会の様を呈したことだ。かなりの者がスタンスについての注意を受けていた。

フランソワ先生は(講習会が始まるとすぐに彼は、先生と呼ばれるようになった。)基本的にスタンスを使わない上半身のみのクライミングが嫌い、足ブラで動く者がいると、テクニックがないと顔をしかめながら首を横に振り、マットを指さし棒で、苛立たしげに叩くのだ。

課題に使われているホールドの多くは、かかりが良い。が、スタンスは、決めづらいものかこれまでのホールドを使わなくてはいけないため、どうしても複雑な組立が要求される。ムーブを読むのが難しく、さらに動きそのものが悪く、雑に力で(とりあえず一手)ねじ伏せてもすぐに行き詰まってしまうと言う感じである。先生に言わせると、みんなが落ちるのは、力ではなくテクニックの問題だとのこと。

後日講習会用の課題をやってみた。もちろん私は落ちまくるのだが、ムーブやホールドに、お前には無理だ！と拒絶されると言う感じではない。なかなか良いホールドだ。やっていれば、だんだんと技が付き、できるようになる気がする。しかもいくつかのムーブは大変新鮮だった。

その4 世界と日本

今回設定された4つの課題は、それぞれ、コンペを念頭に置いた、オンサイト用のものである。易しいものは、ルートグレードに換算して 5.11

程度、最難は、約75手の7C/8A(ルートグレードかどうかは不明?)

もしも世界トップレベルのコンペを感じたい方には是非1度試してもらいたいと思っている。そういえば、ちょっと前にユージ先生が誰かに吐き捨てるように言っていた。「もし世界を目指すなら、奥の空間的なボルダーをやらなきゃだめだよ、もし国内のコンペなら手前(ただのフラットなコンパネボルダー)の方が良いだろうけどね。」

今回の講習は他にも多くのポイントがあった。講習に参加したそれぞれのクライマーが、彼の教えようとしたことを理解し、さらに今回の講習の内容を、参加しなかった他の多くのクライマーに伝えてくれることを希望している。

いちおう今回の課題は将来ルグランより大物クライマーにこのホールドはじゃまだ、とどかされるまで、保存しておく予定だ。ぜひオンサイトで多くのクライマーにやっていただきたい。課題をやれば、フランソワのクライミングの感じも伝わるだろう。また今回の講習の一部始終を納めたビデオもKAI企画にて制作中である。興味のある方はぜひお問い合わせ下さい。

最後に今回の講習の先生である、フランソワ・ルグランと、本来講師を務めてもおかしくないのに、通訳と補助講師を務めてくれた平山ユージにこの場を借りて厚くお礼を言いたい。「本当にどうもありがとう」

以上は「ランナウト」に書いた原稿

現在; 7Aでは度重なる工事と改装でその課題は完全に消滅多面体も無くなってしまっている。

また、ビデオも存在していない。

何枚かの写真が残るのみ。

ちなみに、2000年の夏、コアゲームのために来日し、再びセブンエーへやってきた、フランソワ ルグランは当時のことを、あまり覚えていないようで、ちょっと、安心しました。

もしかしたら、フランス語のできない自分に、あれこれ言うのが単純にめんどくさかっただけかもしれないけど、